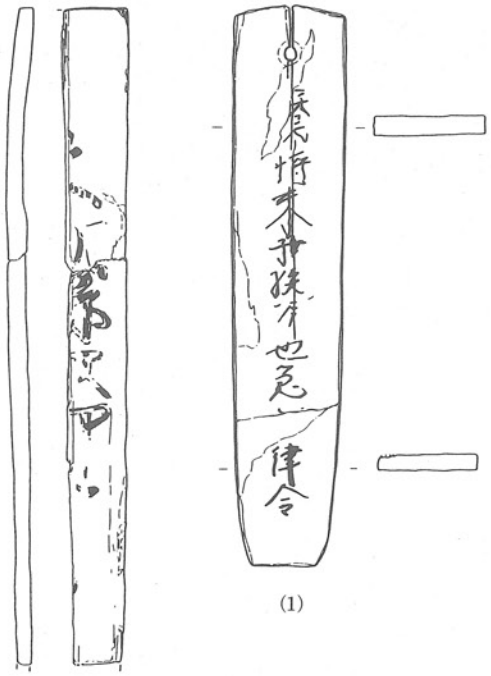

(1)

(2)

木簡の穿孔位置

二条大路木簡に、天平八年（七三六）の年紀をもつ京職の進上木簡が数点ある。このうち日付が四月の木簡は、いずれも穿孔がある。穿孔の位置は、木簡の大きさに関係なく上端から一㎝弱で共通し、規格性が感じられる。一方、左右のバランスは、木簡の中心のものもあるが、右にずれるものもある。中心に穿孔のある木簡は、文字がやや中心からずれていたり、穿孔より下から文字が書かれているため、穿孔によって文字が失われないものである。ずれているのは、中心に穿孔すると記載内容が失われる場合であり、文字をよけて穿孔していたらしい。

一方、日付が六月や八月の木簡は穿孔がない。正月の木簡は穿孔の上端からの距離が異なる。天平八年四月付けの京職進上木簡の出土が多いＪＦ一〇地区で、年紀のない四月七日付け右京職進上木簡が出土しているが、この木簡は下端に穿孔がある。この木簡も天平八年だとすると、四月七日と八日の間に変化があったことになる。こうした穿孔の違いは、事務処理の変化を感じさせるが、事務担当者が交替したのだろうか。ちなみに長屋王家木簡では特に文字部分の穿孔を避けた形跡は乏しい。

一見無造作な穿孔の位置にも、理由がある場合もあるようだ。

（馬場　基）